

生の力と知性の希求 (2)

——ヘレニズムの思想の一断面——

友村(種山)恭子

1. 第2部のための序論——「自然的動物」としての人間の問題

この表題のもとに、われわれが検討しようとしているのは、「生きる」ということと、「知性を発動させる」ということとが、どういう関係にあるかということである。もう少し詳しく言えば、動物の一員である人間にとって、「知性」とは要するに、自然世界で生存して行くための「知能」と同じものであって、例えば古代ギリシアのアナクサゴラスが「知性こそが、万有を導いている」⁽¹⁾と説明したのは、観念的動物である人間特有の誇大妄想であるのか、それとも逆に、人間の内奥にある知的エネルギーは独自の方向を目指しており、何らかの理想を望見しているのであって、「文明」とは、いわば理不尽な外的条件を克服して、これまでになかった「美」や「調和」を実現する道程を経て達成されるものなのか——こうした問題を、ある角度から検討するのが、本稿第1部からのわれわれの課題である。

身体的に分業してしまった蟻や蜂は、本能 (instinct) に従って自分達の社会を造り上げ、ほとんど自動的に社会生活を営む；身体的に分業しているわけではない人間は、「知能」 (intelligence) を駆使して生きるための工夫を凝らし、また、自然が備えてくれた虚構を描く能力 (fonction fabulatrice) によって、部族の神という虚像を描き出し、それを中心としてそれぞれ社会集団を構成する。——これはベルグソンの説であるが、こうした説が展開されている『道徳と宗教の二つの源泉』⁽²⁾が出版されたのは1932年、ナチスの勢力が強大になり、

翌年にはヒトラーが首相になるといった頃である。「人間は知性を授かっており、自由である。だが片時も忘れてならぬことは、人間種の構造のプランのうちにも、蜂のそのうちにも、前もって社会的生が織り込まれているということ、社会的生は必然のものだということ、自然 (la nature) はわれわれの自由意志 (nos volontés libres) にいっさいを任せきることはできず、したがってまた自然としては、一人または数人が命令し、他の者たちは服従するように手配するするほかなかったということである。」もっとも、人間に「首長」(chef) と「隷民」(sujet) という二種が固定的に存在しているというわけではなく、「われわれの一人一人が、命令本能を持った首長であると同時に、また素直に服従する臣下に造られているというのが事の実相なのである。」ただ大部分の人間にあっては、服従傾向が優越しているが、例えば革命の際に、従順だった市民が突然変貌するのが目撃される——と、ベルグソンは言う。そして彼が次に指摘するのは「われわれの胸底深く眠っている首長の性質の一つに残忍性がある」という点である。「自然はさまざまな種を産み出すものであるとともに、同時にまた容赦なく個を犠牲にするものである以上、この自然があらかじめ首長というものを備えておいたとすれば、自然の意に適うのは、たしかに冷酷無情な首長だったに違いない。このことは歴史全体が証拠立てている。⁽³⁾」

夢心地のままに何らかの「民族の神」を思い描き、その幻影に引きずられて興奮状態で外敵を仮想して闘争心を起こしたり、自己の内に自然に起こって来る自問を自分で押し殺し、「首長」の命じるままに、「これこそ至上命令だ！」と自称「正義の戦」に生命を投げ出したりするような精神性は、傍迷惑でもあり、そのような人物が主導権を握っているようなポリスや国家——あるいはまた暴力団体——では、全員がそうした無理な興奮状態を維持しているか、秘密警察が民衆を監視して強制的に体制に従わせるかしない限り、組織全体が崩壊する⁽⁴⁾という危機を孕んでいる。

それでは「強制的に思い込まされた」ための、あるいは「習慣付けられてそ

う思い込むようにさせられてしまった」ための「思い込み」とは異なり、われわれ各人が——人種や階層などに関係なく——人間である限り、自分に賦与されている内発的な認識能力で全く無理なく受け入れ得る「知識」というものがあるとすればそれは何なのか、あるいは、そもそもそのような「知識」があり得るのか？ そうした知識としてプラトンが注目しているのは「数学」であるが、われわれは、「数学」と「問答法」（ディアレクティケー）の関係や、「明確な知識」とは何かについては、ここでは主題としては扱わない。⁽⁵⁾

われわれが本稿のこの第2部で検討するつもりの問題は次の通りである：——プラトンは確かに、数学的知識を重視してはいる。しかしそれが前提（公理）から整合性を守りながら演繹という下降の過程を一方向的に辿り、前提そのものを吟味しないという点と、補助手段として視覚的形象を用いているという点で、なお「明確さ」が十分でないとし、これに対して、「明確さ」において数学より優るものとして「問答法」を挙げている。「問答法」は、『国家』では、前提そのものを吟味し、前提から下降する代わりに、前提のそのまた前提と考えられるものへと遡って行くという方法として、人間の最高の認識能力である「知性的思惟」（ノエーシス、noēsis）の働きの過程を示すものなのであるが、⁽⁶⁾この「問答法」は、『パイドロス』では「物事を自然本来の性格に従って、これの一つになる方向へ眺めるとともに、また多に別れるところまでも見る」という分割と総合の方法だとされており、⁽⁷⁾『ソピステス』ではまた「もろもろの〈類〉（genos）に従って分割すること、そして同じ〈形相〉（eidos）を異なった〈形相〉と考えたり、異なった〈形相〉を同じ〈形相〉と考えたりしないこと」が「問答法」の知識に属する仕事だとされているのである。⁽⁸⁾——すなわち、プラトンの場合、それぞれ独自の多様な性格を持っている対象を「無限に多様」として放置することも、「万物は一つ」と洞察した気分で恍惚としていることも、少なくとも学問的に（あるいは哲学的に）対象を研究しようとする者にとっては、許されないのである。⁽⁹⁾彼の言う哲学的「問答法」とは、個々のものの独自

の特性を明確に認めながら、それらがどのような〈類〉もしくは〈形相〉のもとに包摂され得るのか、相互の不可分の関係はどのようなものと考えられ得るのかを探究する方法だということになる。そしてこれは、個々に相違する多様な要素を含みながら、一つの完結した全体をなしている有機的な宇宙をモデルとして、多様な構成員を協調させて一体性のあるポリスを構想しようとしたプラトン⁽¹⁰⁾にとっての重要な方法だったと言えるのである。

ところで、自然世界全体を——プラトンのように、天体の見せる数的比率に従った回転運動に顕現されるような「知的な魂（プシューケー、psychē）」によって統括されている有機体⁽¹¹⁾として、これを見るのではなく——文字通りの生きもの、すなわち、馬、象、羊、鶴、トカゲ、シラミ、魚類、様々な植物などを飽くことなく観察しながら、「自然」（ピュシス）というものを考えたのが、アリストテレスであることは言うまでもない。アリストテレスにとっては、自分で成長し自発運動をするものが、「自然によって（physei）」あるものなのであり、「自然」とは、こうした生きものが動いたり、じっとしたりすることの原理（アルケー、arkhē）であり、また、こうしたいわゆる「生きもの」だけでなく、土、火、空気、水といった「単純物体」にしても、例えば火は「自然に」天球の表層部（＝上）という自分の固有の場所へと上って行くのだから、こうした物体もまた、内発運動の原理である「自然」によってあるものなのである⁽¹²⁾。こうした「自然」によってあるもの、特に、人間のように「知性」を賦与されているのではない動物や植物を見ると、その「自然」は明らかに合目的性を示しているとアリストテレスは言う：——燕が巣を作り、蜘蛛が網を張り、植物が栄養を取るために根を下におろすのは、人間的な「技術」（テクネー、technē）によるのではなく、探究したり考慮したりしてのことではなく、明らかに「自然」によってなのであり、従って、「自然」に合目的性が見られるのだ、というのである⁽¹³⁾。

アリストテレスについては今は詳論を控え、ただ必要に応じて言及するにと

どめたいが、ここでは、動植物を観察し分類し、このように「自然」によって働く非知性的な生きものの働きと、知的動物である人間の技術とを截然と区別するアリストテレスが、人間の間にも、「家畜なみの人間」と「主人としての資格のある人間」とを区別していた点に留意しておきたい。¹⁴⁾

ところで、「自然」の手の内にあるものとしての人間は、蟻や蜂の場合と同様、首長と奴隷の序列から成る小社会を形成し、首長には残忍性が潜んでおり、こうした小社会は互いに闘争すると言った、上記のベルグソンは、奴隷制を土台としていた古代都市などは賈の民主制に過ぎないと言う。「実際、民主制こそは、ありとあらゆる政治思想のうちで自然から最もかけ離れたものであり、〈閉じた社会〉の条件を——少なくともその意図の上で——越え出ている唯一の政治思想なのである。」民主主義は人間に不可侵の権利を付与するが、こうした諸権利が侵されずに永続するためには、すべての市民が、カント流に言えば「立法者にして臣民」であることを要求される。「自由」と「平等」とは元来相互に矛盾する。しかし「同胞愛」(fraternité)が、前二者を和解させる肝心要のものであることがわかるだろう、とベルグソンは言う。「すなわち、これこそ民主主義が福音書の本質 (essence évangélique) のものであり、その原動力は愛 (amour) だ、と言わしめる所以のものなのである。」「愛せよ、しかして汝の欲するところをなせ」という標語に対応する、民主的でない社会の表現は「権威、位階、固定性」となるだろう、と言う。理想的な民主主義を考えると、「そこに見ねばならぬものは、ひたすら一つの理想 (ideal) なのであり、あるいはむしろ人類が進み行くべき一つの方向である。¹⁵⁾

ベルグソンにとっては、「自然」とは、残忍な「首長」と服従する「臣民」への分業を命じる呵責のないものであり、そうした「自然」の桎梏を断ち切ってはじめて全人類は融和し得るのであり、その桎梏を断ち切るには、キリスト教といった大宗教の宗教的直観に俟たなければならない、ということになる。——しかしまた、われわれとしては、「教会」そのものが「権威、位階、固定性」

によって身を守り、外部に対して攻撃的に身を構え、「教会」が「神の正義」と思いなすものを受け入れられないような異教徒もしくは異端者を「敵」として抹殺しようとした事実もあり、現に「教会」そのものが「教条」を強制する「閉じた社会」になる要因はいくらでもありそうだという点を付け加えておきたい。

しかし「自然」とは何なのか？ 自然科学諸分野の専門家から見れば、アリストテレスの「生物学」は博物館行きのものであろうし、ベルグソンの言う「自然」も時代遅れに違いないとも言える。しかし、どの時代どの地域においても、人々はまさに自分の使用している言語の背後に、漠然とした背景をなしている観念によって方向付けられているものであろう。実際、生物学に深入りし、推論形式の妥当・非妥当を綿密に吟味したアリストテレスが「本性上、〈奴隷〉である人間が存在する」と言明した時、それは、奴隷を必要とした社会の要求が、こうした言明を正当化する背景となり、またアリストテレスのこうした言明が奴隷性を正当化するという全体的な知的風土があったと言えるのであり、こうした中では、「すべての人間は自由な主体である」と断言するにも、その根拠を与えるほうがむしろ困難だったと言える。

さてわれわれはここで、古代において、ポリスの枠が崩壊した後のヘレニズム時代に目を移したい。「ポリスの秩序のため」という至上命令はここではもはや意味を失う。そしてわれわれは特に、「自然」の外部にイデア的な存在を全く認めない自然主義者もしくは物体主義者であったストア派、しかも、人間すべてを「宇宙市民」（コスモポリターース）として見ようとしたストア派に注目したい。

2. ストア派

(a) 〈自然世界の中の生物〉としての人間

「生きもの (zōion) の持つ根源的な衝動 (hormē) は自己保存に向かうものだ、というのがストア派の主張である」とディオゲネス・ラエルティオスは伝

えている。そして彼はこれを説明して、「というのは、クリュシッポスが……述べているように、自然 (physis) がそもそもの初めから、生きものが自分自身に親しいものとなるようにしているからである。すなわち彼 (クリュシッポス) は……くすべての生きものにとってまず第一に親しい (oikeion) ものは、自分の身体の構造 (systasis) と、それについての意識 (syneidēsis) だ」と言っているのである。⁽¹⁷⁾つまり——とディオゲネス・ラエルティオスは続ける——クリュシッポスの言うところでは、「く自然」が生きものを、自己疎外させるようにしたということは、ありそうにないことであり、また自然が生きものを造っておきながら、それを自己疎外しないまでも、自己に親しいものにもしなかったということも、ありそうにないからである。だから、く自然」は生きものを構成した時に、これを当の生きもの自身にとって親しいものとした、としか言いようがないのである。⁽¹⁸⁾だから「自然」はすべての生きものをして、自己に愛着を覚えるものにしたのであり、その「自己」というのも身体構造やそれについて自分が直接的に感じている意識だ、ということになる。⁽¹⁹⁾「だから、生きものは自分に害をなすものを押し退け、自分に親近的なもの (oikeion) へと向かって行くのである。」

アリストテレスの場合も、上記第1節で見たように、「自然」そのものに合目的性が備わっていた。しかしアリストテレスは、蜂や蜘蛛や植物の場合には、巣を造ったり根を下ろしたりするその活動に「自然」の働きを見たのであるが、こうした働きと、人間的技術の間に一線を画していた。こうした動物や植物は「理」(ロゴス)を解する「知性」を持たないのである。——こうした規準でアリストテレスは、人間の中にも自分で自分の主であり得る、つまり「理」を弁えて自主的に判断し得る「自由人」と、他者に従属して肉体労働を提供する見返りとして保護してもらうほうが、本人にとってむしろ有益であるような「奴隷」とが、本性上 (= 「自然によって」) 存在することを主張していた。⁽²⁰⁾

われわれは、しかし、こうしたアリストテレスの主張に異論を申し立てるべ

きかどうかは保留するとし、むしろ、アリストテレスの先駆者であるプラトンが、どのような意味で、「知性的思考・思惟」を「身体的感覚と結び付いた思惑」よりも上位にあるとしたかを思い起こしたい。いまの場合われわれは、感覚がその都度もたらず色や音は単なる流動であり、——例えば「白いものが移動している」と発言するにしても、あるいは「この部分が白色から黒色に変化する」と発言するにしても——「白いもの」や「この部分」を指示するには、そう発言する側の能動的な指示作用がなければ、そのような発言は不可能だ、としている『テアイテトス』⁽²¹⁾を挙げたい。実際、プラトンが批判しているのは、その都度の感覚的刺激から空想的に対象を思い描いているだけであるのに、「これが真実だ」と大言壮語する連中だったと言える。

ここで、われわれが指摘したいのは、「認識能力」と「認識の対象」とが表裏一体をなしているという点であり、プラトンもそれを明確に述べているという点である。つまり、「これこそ疑いの余地もなく明確もしくは明晰判明だ」としてわれわれが何かを把握する場合、そのようにして把握される内容は「真」として自覚されるであろうが、それと同時に、こうした内容を明白な「真」として把握しているのは——「そうであると言えるような気もするし、そうでないと言えるような気もする」という曖昧な、あるいは無理に思い込んでいる場合のような精神状態とははっきり異なっているところの——「知的活動」のはずなのである。⁽²²⁾(実際、把握する側の人間の精神状態如何を問わず、「厳然たる実在」が存在すると思ひ込み、自分はそれが「実在すること」を知っているのだと主張する人だとか、逆に何を把握したというのか、その内容も定かでないのに、「自分は世界の実相を洞察し得る選ばれた者だ」と主張してはばからない人があるとすれば、そうした人は自称「天才」の満足感に浸っていればよいのであろうが、しかしその人は他人から無視されても苦情を申し立てる根拠を持たないだろう。)

ところで、プラトンの場合には、現実にはまだ完全に実現されていることは

ないが、少なくとも「天上のパラダイム」⁽²⁴⁾として現実の人間に方向を示唆するイデア的な「美」や「正」が、「問答法」を通じて次第に明確な姿をとって現れるであろうという確信があったからこそ、現実の閉鎖社会の制約のもとでの視野狭量な価値観を越えた、こうしたイデア的な「美」や「正」の实在性を確信し得たと言える。——実際、探究方法とその対象とは表裏の関係にあるわけである。

ところがヘレニズム時代のストア派では、「問答法」(ディアレクティケー)の意味も変化し、これと表裏をなして「实在」の意味も変化する。ストア派にとっては、「問答法」には、言語そのものを扱う部門や、言語で指し示されているもの(意味)を扱う部門があり、このうち「意味」を扱う部門にはまた、「表象」(パンタシアー、phantasiā)を扱う部門と、表象に基づいて成立する「命題」などを扱う部門があり、⁽²⁵⁾中でも「表象」を扱う部門の「問答法」が必要なのは、「軽率な誤りを犯さないため」であり、これは、表象に対して、「人がいつ同意を与えるべきか、また与えるべきでないかの知識だ」というのである。そして「知識」(episthēmē) そのものについては、ストア派はこれを「誤ることのない把握(カタレープシス、katalēpsis)」、もしくは「表象を受け入れるに際して議論(ロゴス)によって動揺させられることのない状態」⁽²⁶⁾だとしているという。

すなわち、ストア派にとっては、以上のように言われる場合の「議論もしくは言論」(ロゴス)とは、感覚界を越えたイデア的对象を発見する方法を意味するのではなく、むしろ、「表象」を表現する形式であり、だからまた、人は「言葉」に誑かされて、与えられた「表象」を自分で打ち消したり、歪曲したりする場合も出て来る。——実際、ストア派が「論理学」の領域で、今日の「命題論理学」の「恒真命題」を整理しているのが見られる。⁽²⁷⁾従って、厳然として存在する対象についての正当な認識の決め手になるのは「表象」、それも、言論によって動揺させられて思い浮かべたものではなく、「把握的表象」すなわち〈現実存在しているもの〉(ヒュパルコン、hyparchon)から生じ、しかも〈現実

に存在しているもの」に即して「魂に」刻印され押印されるもの⁽²⁸⁾である。

ところが、どんな動物でも、感覚を持っている限り、表象を持つのであろう。「感覚を持つなら、表象（パンタシア）と欲求（オレクシス、orexis）を持つものだ。何故なら、感覚のあるところには〈快〉と〈苦〉があり、これらのあるところには、必然的に〈欲望〉（epithymiā）もあることになるからである」という言葉がアリストテレスに見えている⁽²⁹⁾。「表象」といっても、アリストテレスは、これにもいろいろとあり、「思惟すること」（noein）も、一種の表象であるか、あるいは表象なしにはあり得ないはずだと言うのであるが⁽³⁰⁾、しかし彼はここでも、人間と動物をはっきり区別しており、人間以外の他の動物の表象は感覚的であるが、推理的能力を持つ動物（「ロゴスの（logistikon）動物」＝人間）だけが「熟慮的な（bouleutikē）表象」を持つのだと言う⁽³¹⁾。

しかしわれわれは、本稿では、ストア派の「把握的表象」はプラトンの認識論に対して、どのような点で反論になり得るかといった問題は保留するとして、次節では、プラトンの言う、人間に賦与されている最高の知的能力がはじめて把握し得る、非物体的なイデアの世界を全く認めないストア派が、倫理的側面でどのように考えたかに焦点を合わせたいのである。

(b) ストア派の「パトス、衝動、自然」

プラトンが、生命の原理である「プシューケー」でも、その知的な部分こそが造物主によって直接造られたもので、「激情」や「欲望」の部分は、前者のような純粋な魂が地上で生きることを余儀なくされた時に、身体とともに付け加えられた、と言ったとき、それは——ピュタゴラス主義との関係はさて措くとしても——限られた資源を奪い合って闘争したり、民衆扇動家の弁舌に興奮して愚劣な戦争を仕掛ける獣めいた衝動が人間に潜んでいる、という洞察に基づいてのことであった。

ところがストア派では、「生きもの」の根源的な衝動は「自己保存」に向かう

ものだとし、人間も——別世界の天上から下ってきた魂が身体に埋め込まれている存在なのではなく——自然世界の「生きもの」の一員に過ぎなかった。すると「パトス」(情動)はどういうことになるか。

「ストア派の主張では、パトスとは過剰な衝動である」と、5世紀頃のアンソロジーの編者ストバイオス⁽³⁴⁾は伝えている。パトスにも基本的なものと、そこから派生するものがあり、基本的なものとしては「欲望」「恐怖」「苦痛」「快楽」があるが、中でも前二者が先行するのであって、「欲望」は「善いと見えるもの」に関係し、「恐怖」は「悪いと見えるもの」に関係する。そして、その結果として「苦痛」と「快楽」が生じる。つまり、欲求する対象をうまく手に入れるとか、恐れていたことを免れた場合に「快楽」が生じ、逆に、欲求する対象を手に入れ損ねるとか、恐れていたことに出くわすとかする場合に「苦痛」が生じる。——こうした説をストア派が主張していたという。

もともとストア派は、生きものにとっての根源的な衝動は「快楽」に向かうものだというような説に反対している。彼らが、生きものはすべて「自然」によって、それ自身の身体構造に愛着するように造られており、従って自分の構造に有害なものを押し退け、自分に親近性のあるものに向かって行くと考えた、と伝えているディオゲネス・ラエルティオスの言葉は、第2節の冒頭で挙げたが、その箇所に引き続いて彼は、生きものが自分の構造に適合したものを手に入れる場合に、結果として「快楽」が生じるというのがストア派の見解であったと伝えている⁽³⁵⁾。動物が自分の身体構造に適合した体位をとったり運動したりするのは、試行錯誤で「苦痛」を覚えては、それを避けようとした結果、そうなったのではなく、逆に、苦痛を覚えながらも、「自然」の要求することへと自分を訓練するものだ、という⁽³⁶⁾。ここには、自然世界の「生きもの」すべてをも、個々の人間の身体をも、いわば操っている「自然」の力が働いているとう図が見られる。

むろんアリストテレスも、われわれが第1節で見たように、人間と違って知

性を持たない蜂が巣を造ったり、動物と違って感覚すらも持たない植物が地下へと根を伸ばしたりするのは、そうした生物において「自然」が働いているからだとし、だから「自然」そのものに合目的性が見られるのだとしていた。しかしアリストテレスは、こうした動植物を方向付けている「自然」（ピュシス）の働きと、人間の「技術」（テクネー）の間に一線を画していた。確かに「〈技術〉は〈自然〉を模倣する⁽³⁷⁾」が、「技術」のほうは、「技術によって製作されるもの」（例えば家屋）とは別なもの（建築家）の中にある原理（アルケー、この場合は始動因）であるのに対し、「自然」のほうは、例えば人間が成長する場合、それが宿っている当のもの（人間）の中であって、それを成長させる始動因となっているのである⁽³⁸⁾。プラトンと違ってアリストテレスは、知的造物主が素材に秩序を課したという見解は取らないわけであるが、しかし、本能のままに（「自然」に従って）巣を造ったり網を張ったりする動物のうちで働いている働く「自然」よりも、「技術」のほうを上位に置く。「技術」は「自然」を模倣するが、しかしまた、「技術は、自然がなし遂げることの出来ないことを、成し遂げる⁽³⁹⁾。」しかしストア派では、「技術」が「自然」の中に取り込まれていると言える。

(c) 「技術」の意味の変化、生命体に働く技術

プラトンの言う「技術」として、例えば「医術」を取り上げると、それは身体にとって一番善いあり方を知っていて、それを目指し、「何故そうするか」の理論を弁えていて、患者を多少痛い目にあわせても、治療するものなのであって、その点、相手に迎合して、相手の欲しがるものを提供する「料理のコツ」とは対照的だとしている言葉が、『ゴルギアス』に見えている⁽⁴⁰⁾。こうしたプラトンの発言は、単に「多数者」に迎合するような弁舌で喝采を得ることを狙い、ポリスが崩壊する危険をも顧みない弁論家の「弁論術」を、「料理のコツ」になぞらえるために言ったものであるには違いない⁽⁴¹⁾。しかし、政治面でのプラ

トンのこうした見解に対応する構図が宇宙論にも見られ、『ティマイオス』には、それ自身だけでは無秩序のまま崩壊しそうな素材に「知的造物主」が上から秩序を課するという構図が見られることは、第1節でも見たとおりである。そして、「自然」そのものに合目的性が見られることを強調しているアリストテレスも、上に見たように、推理し熟慮する人間の「技術」のほうを、知性なき動物の本能的な（「自然」に従った）働きよりも上位に置いていた。

ところが、われわれはいま、3世紀のプラトニスト、プロティノスを引合いに出したい。プロティノスは、ストア派のような物体主義者とは逆に、われわれも世界のすべても、「善なるもの・一なるもの」から溢れ出る、非物体的な、しかし比喩的に言えば光ともいべきものの照射を受けて、生き、知的活動を営んでいるのだとしているのであるが、彼は、この世界全体が、素材を前にしてあれこれと推理し工夫しながら「工作者」（デーミウールゴス）によって造られたという観念を受け入れない。材料を前にして推理をこらすなど、人間界の下手な職人のすることではないのである。⁽⁴⁾

確かに、「物体主義者」のストア派とプロティノスとは基本的に異なっているが、しかし、外的な素材を前にして頭を悩ませている「工作者」の像の代わりに、生の源泉として、プロティノスが「自ずと光を照射する光源」ともいべき「一なるもの」を語ったとすれば、物体主義者ストア派は「〈自然〉とは、方法に従って〔世界の〕生成へと向かって進んで行く、技術的に働く火であり、これはまた、火の性質を持つ、技術的な〈気〉（ pneuma ）と同じものだ。」⁽⁴⁾と言っているとディオゲネス・ラエルティオスは伝えている。もっとも、細部の点では、ストア派内部にもいろいろな見解があったようであり、ストア派の説はまた、ストア派への反対者を通じて伝えられていることも一再ではないというのが現状であるが、ここでは、ディオゲネス・ラエルティオスを手がかりとしながら、以下、本稿の主題、すなわち、自然に内在する要因だけで、「全人類の調和」というような観念の支えになるものが得られるだろうかという点に、

焦点を合わせたい。

そしてこの節の結論として次の点を指摘しておきたい。すなわち、プラトンのほうは、いわゆる素材（物的次元のものであれ、身体的・獸的本能に支配されているままの個人であれ）だけでは、宇宙全体もポリスも崩壊する危険性を感じ、だからこそ、ポリスにとって最も善い状態を洞察し得る統治者を必要とし、宇宙にあっては、現に、「最善」を目指す知的存在が、宇宙に秩序を与え、これを導いているというように「賦課法則」⁽⁴⁶⁾（ホワイトヘッドの言う）の考えに傾き、従って、宇宙においてもポリスにおいても、多が一に統合されて一体をなしているという「最善」の状態を把握するには、多と一の関係を把握し得るわれわれの知的能力を訓練し、そうした「知性の捉えるイデア的世界」へと目を向けなければならなかった。「自然」に合目的的な働きを認めたアリストテレスも、蜂や燕の本能と比べて、人間の「知的能力」を誇っていた。

しかしストア派は、生きもののうちに働く「自然」の中に、淀みなく流れるように働く技巧の力を見る⁽⁴⁵⁾。そして「宇宙の種子的ロゴス（スペルマティコス・ロゴス）」である神は世界に内在しながら、精子（スペルマ）のように世界秩序を形成し、⁽⁴⁷⁾「一定の周期に従って、全実体を自己の内へと吸収しまた再びそれを自己の内から生み出す」⁽⁴⁸⁾。ここには、文字どおりの「生きもの」をパラダイムとする宇宙像が描かれている。それでは、蟻や蜂のようなものとしての人間の勇猛な闘争の可能性は、ストア派ではどう考えられているのか。

(d) 「生きもの」の世界の一体性

われわれは先に(b)で、ストバイオスが、ストア派では「パトス」が「過剰な衝動」だとされているのだと伝えているのを見たが、実はストバイオスは「パトスとは過剰な衝動である」という言葉に引き続いて、「それはまた、指令するロゴスに不従順な衝動、もしくは、魂の非合理的で反自然的な運動である」⁽⁴⁹⁾と言っているのである。しかしこの場合の「ロゴス（理性）」は、イデアの世界を

把握するものではなく、宇宙の隅々にまで浸透して、あらゆるものを保持している「氣」のようなものである。神は「知性」(ヌース)とも呼ばれるが、この「知性」は「宇宙のあらゆる部分へと浸透しているのであって、それはちょうど、われわれの〔身体の〕あらゆる部分に、プシューケー(魂、生命の原理)が浸透しているのと同じである。ただし、ある部分にはより多く、他の部分にはより少なくというように、浸透の度合に差がある。」という。「すなわち、〈知性〉はある部分においては、たとえば骨や腱の場合のように、単なる〈保持する力〉(ヘクシス)として行き渡っているが、他の部分には、魂の〈指導的部分〉(ヘーゲモニコン)の場合がそうであるように、まさに〈知性〉として行き渡っているのである。⁽⁵⁾ ディオゲネス・ラエルティオスはまた、宇宙においては、「天にあるものと地上にあるものが共有している〈呼吸〉と〈緊張〉が、宇宙の一体化を必然にしているのだ⁽⁶⁾」というストア派の説を伝えている。

つまり、プラトンの「魂の知性的部分」は天上に向かっていたが、それに相当する、ストア派の「魂の指導的部分」は、この現実の自然世界のあらゆるものに浸透し、生きものの内部で生理機能としても働く「生命の力」の、濃厚な部分だと言えよう。そしてそれは、生きる宇宙全体に浸透して統括している生命的な力の分身のようなものだと言えよう。従って「自然に従って生きる」ということは、全体性を備えた有機体としての宇宙の方向に即して生きることを意味するだろう。だからまた、視野狭量の精神性が「パトス」に押し流されることになる。

むろん、「自然に従って生きる」ことが具体的な社会生活でのモラルとどう折り合えるのか、あるいは前者が後者をどのような根拠で正当化し得るのかといった問題については、他の学派からの反論もあれば、ストア派内部でも論争があったようである。しかしわれわれとしては、「自己保存の本能」を根源的な衝動として持つ生きものの一員である人間が、自然に内在する要因だけで、どのようにして相互に——闘争に終始するのではなく——協調し合えるのかについ

での、ストア派の提案の一部を見たことにしておきたい。なおまた、ローマ時代のギリシア人、医師のガレノスは、医学・生理学にかかわるストア派の個々の説に、多々苦情を述べているが、ガレノスの「生氣論」とストア派の学説の関係については、別の機会に扱うことにしたい。 —了—

〔注〕

- (1) Fr. 12. ここに「知性」と訳した「ヌース」(νοῦς) は、Diels-Kranz が“Geist”と訳し (*Die Fragmente der Vorsokratiker* II)、Kirk, Raven & Schofield が“Mind”という訳語を当てているものである (*The Presocratic Philosophers*)。この「ヌース」は確かに「あらゆるものについて知見 (γνώμη) を持っている」と言われている限りでは「認識するもの」に違いないが、しかしこれは宇宙全体の回転運動を起こさせる始動因としても考えられており (以上、同じく fr. 12)、しかも物体的世界は、一旦回転運動を始めると、後は、微細な物体は周辺へ弾き飛ばされ、濃厚な物体は中心部に集まって凝固する (fr. 2, 15, 16 を参照) と言われている限り、「ヌース」は「最初の一撃を与える」始動因という意味を持つことになる。こうしたアナクサゴラスの見解にソクラテスげ失望して場面が、プラトンの『パイドン』(97B-99B) に見られるのは言うまでもないが、いったい、われわれ自身が「明晰判明」とする概念もしくは命題が、実物の外界の構造と実質的にどういう関係を持ち得るのか、あるいは、われわれ自身が推理し工夫して開発する「技術」が、外界の自然世界を頑強に支配している仕組み——人体の構造にせよ、動植物の身体機構や行動のあり方にせよ——と、どういう関係に置かれ得るのかが、プラトン自身の課題となったのである。プラトン自身は、われわれの「知性」と同質の「宇宙の知的な魂」がこの世界全体を秩序付けているという確信を大前提とし、だからこそこの宇宙には、われわれの内発的な知性あるいは推理力が明確に把握し得る数学的秩序が見られるのだとする (*Timaeus* 30A, 32A-C, 33B, 38C-39D, 53B-55C; *Leges* X 897C-898C, 899B を参照)。しかしここで敢えて概括すれば、プラトンにとって、真に人間的な「生」とは、われわれの内奥の「純粋な、知的な魂」であって、激情や欲求は、純粋な魂が地上で生きることを余儀なくされた時に、身体的動物としての人間のために、造物主が付け加えてやったものなのである。だから、地上での試練に際して、人間は本来の知的な魂を出来るだけ純粋のまま保持しなければならないのであり (*Tim.* 46B-D 参照)、人間の精神性を養うポリス全体も「知的な人間」によって秩序付けられなければならないことになる (拙稿「〈論理〉と〈感覚印象〉」文経論叢 26-3, 1991 を参照)。確かに、民衆扇動家が感動をこめたような口調で「愛国心！」と口走るような場合に、その言葉の抑揚に興奮して前後の見境もなく、無謀な戦争に突入することを議会で可決するような「多数者」は、その内面

- で「激情」や「欲望」だけが膨れ上がって「知性」を圧倒しているような動物だと表現されても仕方がないとも言える。しかしプラトンの場合、例えば「人体」も、知的な造物主によって計算づくで組み立てられた一種のロボットのように考えられており（Tim. 72B-81E を参照）、また、ふざけ半分のようにではあるが、頭を使わなかった人間は四足獣に生れ変わり、知性とは最も無縁だった人間は魚や貝に生まれ変わる（*ibid.* 91D-92C）などと言われているのであって、こうした見解は、少なくとも医学や生物学に深入りした人（例えばアリストテレス）にとっては、真面目な「学説」ではあり得なかったはずである。そしてわれわれは本稿で今後、生物学的な自然観では、「知性」がどう位置づけられ得たかをの若干を、ストア派との関連で検討し、その際、アリストテレスにも若干言及する。
- (2) *Les Deux Sources de la Morale et de la Religion*. 訳は原則として森口美都男訳（中央公論社「世界の名著」53「ベルクソン」pp. 215ff）に従う。
- (3) 以上 pp. 1211-2（Henri Bergson Oeuvres, Textes annoté par A. Robinet, Presses Universitaires de France, 1959）
- (4) 貪欲で酔っぱらいのような精神状態の独裁者が、結局は戦戦兢兢とした、いわば獄舎にいるような境遇にある、という叙述が、プラトンの「国家」に見えている（IX 579BC）。
- (5) こうした問題については筆者は「〈論理〉と〈感覚印象〉」（注(1)を参照）や「〈ロゴス〉の意味」（文経論叢 22-3, 1987）などで若干扱った。
- (6) *Respublica* VI 510B-511E; cf. VII 533C-534B.
- (7) *Phaedrus* 266B, cf. 265Dff.
- (8) *Sophistes* 253D.
- (9) Cf. *Timaeus* 55CD
- (10) ホワイトヘッドは、「生きる自然」の像——すなわち、機械論的自然観を現出する道具となったような「物理学の法則」で抽象化された自然像ではなく、「感じ」（feeling）、「情動」（emotion）、「満足」（satisfaction）といった要因が実際に自然界で働いているといった自然像——を構想しようとしているのであるが、こうした文脈の中で、ホワイトヘッドは、限られた明晰性を持つ命題から演繹する特殊専門科学と違って、言語が前提している漠然たる背景を自由に検討するのが哲学だと言っている。こうした点については筆者は「〈生きる自然〉の観念——ギリシア、ホワイトヘッド」（「プロセス思想」 ホワイトヘッド・プロセス学会 第4号 pp. 17-33）で若干扱った。
- (11) この点については、上記の拙稿「〈論理〉と〈感覚印象〉」（注(1)を参照）を参照されたい（esp. pp. 9-18）。
- (12) *Physica* II, 1, 192b 8-32. プラトンの場合は、アリストテレスの言う「単純物体」すなわち四元も、動揺する素材に造物主が幾何学的形態を与え、例えば正四面体である火が面を構成する三角形に解体されると、それが組合わさって正八面体の空気を構

成するというように互換することになる (*Tim.* 53C-55C)。つまり、プラトンの場合は、現実中存在する四元は、すでに造物主によって秩序ある規定を加えられているものなのである。さらに、プラトンの場合は、こうした物体の運動は、穀粒が箕で揺すぶられる時のように「似たものが似たものに向かう」という傾向を示すだけである (*ibid.* 52A-Cを参照)。そして、宇宙内におけるこうした物体は、天の運動として顕現する「宇宙の魂」の回転運動によって束ねられ、ひしめき合い、相互変換をするから、絶えず動きが維持されていることになる (*ibid.* 58A-C)。

(13) *Physica* II, 8, 199a 20-32.

(14) アリストテレス自身の言葉を若干引用しておく：「奴隷の〈自然〉(ピュシス)が何であり、その機能(デュナミス、*δύναμις*)が何であるかは明かである。すなわち、人間でありながら、その〈自然〉によって、自分自身のものなのではなく、他者のものであるという、そのような者が〈奴隷〉なのである。そして、他者のものであるというのは、人間でありながら所有物(*κτῆμα*)であるところの人間であり、〈所有物〉というのは行為のための、しかもその所有者から別個に切り離された道具のことである。」(*Politica* I, 4, 1254a 13-17)そしてアリストテレスは、〈自然〉によって(=本性上)奴隷であるような人間がいるのかどうか、〈隷属〉はどんなものにとっても〈自然に反する〉(*παρὰ φύσιν*)ものなのかを問題にしながら、動物の場合も、家畜のほうが野獣よりも、その〈自然〉が優れており(*βελτίων*)、牡と牝の場合も、前者のほうが後者よりも優れているのであるが、より劣ったものにとっては、支配されることで救いを得るのだと言う。ところが人間においても、動物が人間に劣るのと同程度に、他の人々から劣る人々があり、こうした人々は、自己の内に〈ロゴス〉(理、*λόγος*)を持っていないために、せいぜい肉体労働に従事するしかないが、ただひたすら〈本能〉*に仕える動物と違って、奴隷向きの人間は、〈ロゴス〉を感知することは出来るのだから、その分だけ動物よりは優れていると言える。しかし、生活必需品のために肉体労働を提供するのに有用な点で、家畜も奴隷も変わりはない。もっとも、自由人の魂を持つ奴隷も存在することがあるが、身体に関しても、身体がまっすぐで肉体労働には不向きな自由人と、肉体労働に向けた頑強な身体を持つ人間がいるのは真実なのだから、魂の場合も同様だと考えるのが正当であろう、と言う。そして彼はこう結んでいる：——「従って、〈自然〉によって、ある人々は自由人であり、ある人々は奴隷であるということ、そして後者にとっては奴隷であることが有益なこと、正しいことであることは、明かである。」(以上、*ibid.* I, 5)

*原語は“*παθήματα*”。Barker [*The Politics of Aristotle*]は*instinct*と訳しており、一応それに従ったが、この語はもともと、他から刺激を受けての変化、引いては〈感じ〉を指し、Liddell-Scottの辞典も、この箇所はこの語を“*the feelings*”と解している点を付け加えておく。なお、〈奴隷〉に関するアリストテレスの見解については、拙稿「嫉妬」(岩波書店「現代哲学の冒険」3「差別」1990、pp. 153-207)を参照していたければ幸甚である。

- (15) 以上、Bergson, *op. cit.* pp. 1214-1215. 因に、ベルグソンのこの著作が出版された(1932)、その翌年に、ホワイトヘッドは『観念の冒険』(*Adventures of Ideas*)を出版しているが、この著作でホワイトヘッドが、「人間同胞」(brotherhood of man)について、次のように述べている点を挙げておく：——古代においてはサクソン人が奴隷とされていたことは伝えられているが、サクソン人はキリスト教徒ではなかった。実際、ヨーロッパ人種が、異教徒の異人種と接触したどんな時でも、彼らは奴隷制について、少しの良心の呵責も感じなかったように見える。サラセン人奴隷、アメリカ諸部族の奴隷、なかんずく黒人奴隷のことが書かれている。しかし文明の発達に平行して技術が発達したおかげで、ヨーロッパ人種は、温帯地方での奴隷の使用は免れた。最後に18世紀の人道主義運動(the humanitarian movement)が、人間同胞という宗教的意識と結び付いて、世界から奴隷制を撲滅するという文明政治の政策を生んだ——と。しかし——とホワイトヘッドは続ける——すでに19世紀以前からその世紀にかけて、マルサスの理論だとか、自然淘汰の法則だとかが現れて、人道主義の理想に真っ向から反対するような効果をもたらした。(*Adventures of Ideas*, The Free Press 1961p. 28)
- (16) Diogenes Laertius VII .85.なお、ロングーセドリーの『ヘレニズムの哲学者たち』(A. A. Long & D. N. Sedley: *The Hellenistic philosophers*, Cambridge, 1987)に収められている資料番号をも”L-S”と表記し、L-Sが記しているアルニムの『古ストア派断片集』(I. Arnim: *Stoicorum Veterum Fragmenta*, Teubner 1964)の番号をも”SVF”として付け加える。いまの箇所はL-S.57A [= SVF3.178]。また、ディオゲネス・ラエルティオスの訳としては、加来彰俊訳：ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』(岩波文庫)を参照する。
- (17) 「自然が…生きものが自分自身に親しいものとしているから…」という箇所の原語は、L-Sは、BP写本に従ってテキストは”οἰκειούσης αὐτὸ τῆς φύσεως”。訳は”since nature…appropriates it”。ヒックス(Hicks)のテキスト(Loeb)——以下”H”と記す——ではしかし、F写本に従って下線部分は”αὐτῷ”(SVFと同じ)、訳は”because nature…endears it to itself”。しかしいずれにせよ、これに続く箇所から明らかなのは、”οἰκειῶν”が”ἀλλοτριῶν”(疎外させる)の反対語だということである。次注(18)を参照。
- (18) 「[〈自然〉が] 生きものを自己疎外させるようにした」と訳した箇所はL-Sでは”ἀλλοτριῶσαι αὐτὸ”(「生きものを疎外した」と訳し得る)。しかしSVFは下線部分を”αὐτῷ”としており(従って、「[生きものを]、当の生きもの自身にとって疎遠なものにしたということは……」となる)、またHは、αὐτὸの次に〈αὐτῷ〉を補っている。しかしいずれにしても、すぐ次に記されているように、自然は生きものを、生きもの自身にとって(πρὸς ἑαυτὸ)親しいものにした、と明記されているのだから、前注(17)に記した下線部分やこの注の冒頭で挙げた問題の箇所については、テキストとしてSVFあるいはHに従っておく。

- (19) 因に、3世紀のプロティノス（プラトニスト、新プラトン派として位置づけられている）は、自分の魂のうち、身体にまつわる情動に引き回されている部分を「恥部」のように思いなし、すべての存在の源泉である、上方のいわば光源のような「善なるもの・一なるもの」を仰ぎ見ている「知性活動」を真の自己だと考えた（*Enneades* I, 1）。「プロティノスは、自分が肉体をまとっていることを恥じている様子であった」と、ポルピュリオスは伝えている（*Vita Plotini*, 1）。しかし、ストア派とプロティノスの間に一種の類似点もあり、これについては別の機会に触れたい。
- (20) 注(14)を参照。
- (21) *Theaetetus* 156A-157C.
- (22) 『テアイテトス』や『ソピステス』や『ティマイオス』もそのような原則で書かれているのは言うまでもないが、特に『国家』の「線分の比喩」（VI 509D-511E）を挙げておきたい。
- (23) 『国家』IV 477D-478Dを参照。なお、「善」「正義」「美」などについて、「快樂が最高の善いものだ」とか「弱肉強食が〈自然〉の正義だ」とか、あるいは「目の前の恋人が美しいのだ」とかいった発言は、ごく限られた特殊な状況のもとで歪曲され卑小化された、「善」や「美」や「正義」の影像でしかないであろうし、その都度の具体的状況が押し付けるこうした限定を反省し、より広大な領域に目を向けて行くことによって、次第に純粋で壮大な「善」「美」「正義」の実相へと近づき得るだろう——プラトンのこうした考えは、とりわけ『饗宴』（210A-212A）に見られる。なお「善」や「美」は、「問答法」（ディアレクティケー）による上昇過程を経てはじめて可能になるという意味については、拙稿、上掲論文「〈ロゴス〉の意味」（注(5)を参照）で検討した。
- (24) 『国家』では、第二巻以降構想してきた理想のポリスは、地上のどこにも存在せず、「言論のうちに存在するもの」であり、「理想的な範型として天上に捧げられて存在するのだろう」と言われている（IX 502B）。そこでのプラトンは、そのようなポリスが現にどこかにあるかどうか、将来存在するかどうか、どちらでもよいことだと言っているが、彼にとっては、ポリスの構成員である個人のあり方も、社会としての「ポリス」とパラレルに考えられている以上、個人においても「知性」こそが激情や欲望を統御するものでなければならないという意味で、理想のポリスは、個人の生き方の範型ともなるわけである。そして『国家』の最終巻では、「エールの神話」で、死後の魂の運命が描かれることになる。
- (25) Diogenes Laertius, VII 43-44. (L-S. 31A)
- (26) Ibid. 46-47. (L-S. 31B) .
- (27) この点については、筆者は上掲論文「〈ロゴス〉の意味」（注(5)）pp. 21-23、及び「ストア派の自然観」（上智大学中世思想研究所「中世研究」6『古代の自然観』1989 pp. 73-108）で若干扱った（pp. 80-90）。
- (28) D. L., VII, 46 (L-S. 40C) なお、こうしたストア派の主張は、プラトンの立場から

すれば、何を「現実存在しているもの」(実物)とするかの規準は「把握的印象」であり、「把握的印象」はまた、実物を把握している印象だとするストア派の主張は、堂々めぐりでしかないだろう。拙稿「〈論理〉と〈感覚印象〉」(注(1)で挙げた) p. 27 を参照。実際、こうしたストア派の主張にアカデメイアから異論が出されていたことは、セクストス・エンペイリコスからも伺われる (*Adversus Mathematicos* VII 252)。しかし、われわれがこの第2節ですでに述べたように、「認識能力」と「認識対象」が表裏をなすものだとすれば、ストア派の側からすれば、プラトンは、イデア的世界の实在性を「知性的思惟によって把握されるから」という理由で保証し、「知性的思惟」の確實性を、「イデア的世界を把握し得るから」という理由で保証している点で、堂々めぐりをしていることになる。しかし「認識能力」とその「対象」を分離して考えようとするほうが無理なのであり、「自然世界」の内部だけで、人間が——ベルグソンのような、蟻や蜂なみの域を越えて——「全人類の調和」といった理想を追い求めるかという問題が、本稿の課題なのである。

- (29) *De Anima*, II,2, 413b 22-25. なお、感覚と快・苦、欲求その他の情動の関係については、プラトンは『ピレポス』でかなり綿密に詳論しているが、プラトンはそこでも、情動(パトス)とはもともと身体の欠乏・充足に由来する受動的な動揺だとし、こうした刺激への反応というカテゴリーで考えられる「快楽」などと、能動的に規律を与える知性的な精神活動の充実した欲びとを明確に区別している。
- (30) *De Anima* I,1.403a 8-9.
- (31) *Ibid.* III, 11, 434a 5-7.
- (32) ストア派にとって、「非物体的なもの」(*ἀσώματα*)とは、「語られ得るもの」(レク-ton, *lekton*; L-S の訳は“sayable”; すなわち命題や、命題の部分となる動詞など)と、「空虚」と「場所」と「時間」だけである (Sextus Empiricus: *Adv. Math.* X, 118 = L-S 27D (SVF 2.231)).
- (33) 注(1)を参照。
- (34) この箇所及び以下に続く箇所は、Stobaeus: *Eclogae* 2.88,8-90,6 [= L-S 65A = SVF 3.378,389]
- (35) D. L. II, 86 [L-S 57A]
- (36) セネカは、例えば立ち上がり始めた幼児にしても、転んでは泣くことを繰り返しながら立ち上がるのであり、亀が裏返しになった場合も、苦痛を感じるわけではなくても、じたばたして、正常な体位に戻ろうとするものだと書いている。(『書簡』121.6ff. [L-S 57B])
- (37) *Physica* II,2,194a 22-23.
- (38) *Metaphysica* XII 3, 1070a 7-8. ここでアリストテレスは、「技術」は製作されるもの(家屋)とは別の、製作する側(建築家)の中で働いている、という例に対応して、「自然」は造られ生まれる側の当のものの中で造るものとして働いているのだという例として、「人間が人間を生む」という場合を挙げているが、この例は妥当でない(cf.

- D. Ross: *Aristotle's Metaphysics* Vol. II p.355)。
- (39) *Physica* II, 8, 199a 15-16.
- (40) *Gorgias* 464B-465A.
- (41) 拙稿「〈ロゴス〉の意味」(注(5)) pp. 6-9を参照されたい。
- (42) 本稿では、以上のような見解を述べているプロティノスの『エネアデス』中の箇所を挙げることは省略する。ただし筆者はかつて、『ティマイオス』の *δημιουργός* 像再考——特に『エネアデス』II. 9におけるプロティノスとの対比で(古代哲学会「古代哲学研究」XVII, 1985, pp. 1-16)において、『エネアデス』の該当箇所をいろいろと挙げた。プロティノスはプラトニストであるが、しかし「存在と認識の源泉」については、プラトンの『国家』に描かれている「善」に沿った考え方を展開しており、あれこれ推理し工作する *δημιουργός* の像は、むしろグノーシス派のものとして批判しているのである(上記の拙稿を参照されたい)。
- (43) D. L.: VII, 156. 原語を記しておく。「方法に従って」(*ὁδῶν*) ; 「技術的に働く火」(*πῦρ τεχνικόν*) ; 「火の性質を持つ、技術的な火〈気〉」(*πνεῦμα πυροειδές καὶ τεχνοειδές*)
- (44) 本稿第1部(文経論叢 24-3) p. 8を参照。
- (45) ここで、「ストア派の自然観」(注(27))を参照)にも挙げたエピクテトスの言葉を挙げておく: 「偉大なるかな神、神はわれらに大地を耕す道具を与えたまえり。神は手を与え、喉を与え、胃を与え、知らぬ間に成長させ、眠りながら呼吸させたまえり。」
- (47) D. L. VII 136.
- (48) *Ibid.* 137.
- (49) ストバイオスのこの前後の箇所については、注(34)を参照。なお若干の原語を記しておく。「指令する理性」(*ὁ αἰρῶν λόγος*。因に、L-Sの訳は"the dictates of reason") ; 「非合理的な」(*ἄλογον*) ; 「反自然的な」(*παρὰ φύσιν*)。
- (50) D. L. VII, 135.
- (51) *Ibid.* 138-139. [LS. 470] .なお原語を記す: 「保持する力」(*ἔξις*, L-S: "tenor") ; 「指導的部分」(*τὸ ἡγεμονικόν*)。
- (52) *Ibid.* 140.なお、「……が共有している〈呼吸〉、〈緊張〉」の原語は、*σύμπνοια*、*συντονία*。